

貨幣の本質規定と発生史的方法

佐藤 俊 幸

- はじめに
I 貨幣形態の本質的規定
II 発生史的方法の意義
おわりに

はじめに

本稿の課題は、価値の性格、より根本的には商品生産社会における労働の独自の社会的性格（抽象的人間労働）から一般的価値形態の生成を論証することによって、貨幣形態の本質的規定を与えることの重要性を問題提起することである。私が貨幣形態の本質的規定を研究しようとするにいたった背景、および貨幣形態の本質的規定を把握するにあたり、価値の性格、より根本的には労働の独自の社会的性格（抽象的人間労働）、の展開による貨幣形態の生成の論証ということに着目しその重要性を問題提起するに至った理由は次のとおりである。

まず貨幣形態の本質的規定を研究しようと思った背景について。

金融論において貨幣論は基礎的な研究領域をなしているが、その貨幣論にあつて貨幣の本質をどうみるかということは何よりも重要な問題である。例えば、不換紙幣増発による物価騰貴を解明するに際しても、それに先立って貨幣形態の本質的規定が正確に理解されていなければならない。周知のように、不換紙幣増発による物価騰貴は紙幣流通の法則（流通する紙幣の量は、それ

が代理するところの金鑄貨が流通したであろう量に制限されるべきであるということ)の強制的貫徹として生じるものであり、流通手段の規定性に関わるものである。流通手段は貨幣が商品流通のなかで受け取る一つの規定性¹⁾だから、不換紙幣増発による物価騰貴の把握にあたっては貨幣形態の本質的規定の正確な理解が不可欠となる。実際、貨幣数量説の立場にたったヒュームは不換紙幣増発による物価騰貴を解明できなかったし(ヒューム[19])、また、金および兌換銀行券の流通について貨幣流通の諸法則の支配を説いたフラートンも、貨幣の本質的規定を把握していなかったもので、金と不換政府紙幣との差異と関連を看過し、両者を貨幣という「共通の項目に帰属する」(フラートン[12] 訳54-55ページ)同列のものとして一括してしまい、不換紙幣増発による物価騰貴を理解するにはいたらなかった²⁾。不換紙幣増発による物価騰貴を解明するにあたり、貨幣形態の本質的規定を正確に理解しておくことは決定的に重要である。

次に、貨幣形態の本質的規定を把握するにあたり、価値の性格、より根本的には労働の独自の社会的性格(抽象的人間労働)、の展開による貨幣形態の生成の論証ということに着目しその重要性を問題提起するにいたった理由について。

学説史上、貨幣はその素材的規定や交換の媒介物という性格から理解されるのが通例である。しかし、交換の在り方は根本的にその社会の生産関係によって規定されるのであって³⁾、交換の困難を通じて貨幣が登場してくること自体、商品を生産する労働の独自の社会的性格の発展という商品生産関係それ自身の問題によって必然化されるのだから、交換の問題との関係で貨幣をみるのは誤りである。また、商品経済では人々の社会関係が物に結び付き、物として現れているだけなのだから、貨幣の物的属性それ自体から貨幣を解明することも不当である。周知のように、初めて貨幣形態の本質的規定を正確に説いたのはマルクスであった。彼は、貨幣を商品生産社会における社会的労働(抽象的人間労働)の一般的外化形態=価値の一般的形態としてと

らえ、この規定を価値形態論において価値の性格、より根本的には抽象的人間労働、からの「貨幣形態の生成（Genesis）」の論証をもって解明したのである。ところで、この価値の性格、より根本的には抽象的人間労働、の展開＝「貨幣形態の生成（Genesis）」の論証による貨幣形態の本質的規定の解明ということのうちには、二つの事柄が含まれている。まず第一に貨幣の本質的規定の根源を価値の性格、より根本的に言えば商品生産社会における労働の独自の社会的性格＝抽象的人間労働にもとめたということであり、そして第二に比較類型的な方法によってではなく、発展法則（価値の性格）による事物（貨幣形態）の生成過程の論証を通して事物（貨幣形態）の本質的規定を与えたということである。第一の支柱は重金主義者、スミス、リカード、ベイリー、あるいはまた労働の社会性を各々の生産様式に固有な諸関係からではなく、それとは外的な表象から借用した・労働貨幣論者グリモンなどとの対決のなかで確立されてきたものであり、他方第二の支柱は発展法則の展開のなかで事物を把握してこそ事物の真の認識ができるとしたヘーゲルの思想を受け継いだものである⁴⁾。この二つはマルクス貨幣本質論の支柱であって、これらを理論的におさえることなくして、価値形態論、貨幣の本質的規定は決して理解されないとと言っても過言ではない。

ところが、この二つの支柱が全ての論者によって理論的に承認されてきたわけでは決してない。第一の支柱に対しては、貨幣形態の必然性は、価値の性格ではなく、交換過程の困難との関わりをなかで論じられるべきであるとされたり⁵⁾、さらにまた一部の論者によっては抽象的人間労働という価値の実体を根底にすえて貨幣形態の必然的生成を説いたのは誤りだとさえされている⁶⁾。第二の支柱に対しても同様に批判が向けられている。一般的価値形態の必然性は価値形態を所与として比較類型的な方法で第三形態が価値概念に唯一適合的な形態であることを示せば十分で、事物の生成を説く必要はないとされている⁷⁾。およそ事物は生成・発展の過程において存在しているのだから、事物をその発展法則の展開のなかで説くという方法が当然必要であ

るにもかかわらず、それは不必要な、あるいは間違った方法として退けられているのである。そこで、私はこの二つの支柱の重要性、すなわち価値の性格の、より根本的には商品生産社会における労働の独自の社会的性格（抽象的人間労働）の、展開＝貨幣形態の生成を論証することによって、貨幣形態の本質的規定を与えることの重要性を問題提起しようと思ったのである。

本稿の構成は次の通り。まず、Iにおいて第一の支柱、すなわち貨幣形態の本質的規定の根源が価値の性格、より根本的には商品生産社会における労働の独自の社会的性格たる抽象的人間労働にあることを明らかにし、続くIIにおいて第二の支柱、すなわち発展法則の展開のなかで事物を把握するという方法のもつ意義について論じようと思う。

I 貨幣形態の本質的規定

貨幣を把握する場合、J. S. ミルのように、その諸機能の羅列をもって貨幣を規定するというのがよくみられる方法である（ミル[14] 86-95 ページ）。しかし、そうした方法では解明されない問題が残される。なぜ貨幣はそうした様々な諸機能を営みうるのか、貨幣の諸機能を成り立たせている基本的原理（貨幣の本質的規定）は何かという問題が、それである。貨幣の諸機能は、価値の一般的形態という本質的規定に基づいて貨幣が様々な商品運動のなかで演じる役割にすぎない。だから、貨幣を把握するにあたっては、商品運動のなかで様々なその役割は替えつつも、その根底にあつて常に変わらない貨幣の本質的規定性をまずもって明らかにする必要がある。貨幣の本質的規定も明らかにせずに貨幣の機能、例えば交換手段としての機能を説いたとしても、それは商品を交換において絶対的に手に入れることができるという感性的な表象、経験的な事実を指摘したことにしかならないであろう。

マルクスの貨幣論はこうした学説とは異なる。彼は貨幣の諸機能の羅列を

もって貨幣を規定するという方法はとらず、まずもって貨幣の本質的規定を呈示した。貨幣の纏っている素材の規定を捨象し、商品を生産する労働が社会的労働へ外化しなければならないという点に着目して、彼は貨幣を商品生産社会における社会的労働（抽象的人間労働）の一般的外化形態＝価値の一般的形態として規定したのである。商品はこの社会的労働の一般的外化形態を交換に先立って価値尺度の規定において創造している⁸⁾。そこでマルクスはこの価値尺度の規定のうちに含まれている社会的労働の一般的外化形態という質的側面に着目し、分析をくわえ、貨幣の本質的規定を与えたのであった。

「私の労働は、直接、その反対物として、社会的な労働として、表わされなくてはならない。このような転化された労働は、その労働の直接の反対物としては、抽象的一般的労働であり、したがってまた、一つの一般的等価物で表わされる労働である。……だが、商品は、それが譲渡されるより前に、このような一般的表現をもたなければならない。個人の労働を一般的労働として表示するこの必然性は、一商品を貨幣として表示する必然性である。この貨幣が、尺度として、また商品の価値の価格での表現として役だつかぎり、商品はこのような表示を受け取る」(Marx〔6〕S.133. 訳174—175ページ)。

「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい大きさの労働時間を含んでいる割合でもって測るから、金は価値の尺度となる。そして金が一般的等価物すなわち貨幣となるのは、さしあたっては、ただ価値の尺度としてのこの規定によってだけであって……。この表現では、質的な契機と量的な契機とが区別されなければならない。……一方では、諸商品にふくまれている労働時間の一般的性格が、他方ではその量が、それらの金等価物に現われる」(Marx〔4〕S.50-51. 訳78—79ページ)。

貨幣を商品生産社会における社会的労働（抽象的人間労働）の一般的外化形

態＝価値の一般的形態としたマルクスの貨幣の本質的規定について少し立ち入って論じよう。

商品生産社会は、生産手段が私的に所有され、個々の労働が独立に営まれながらも、社会的分業が自然発生的に実現されている社会である。こうした関係のもとでは「私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にある」(Marx〔1〕S.88. 訳100ページ)。抽象的人間労働それ自体は人間の労働支出の一般的性格であって超歴史的なものであるが、商品生産社会においては特殊歴史的に人々の労働の社会性格を纏うのである。人々の労働の社会的性格は潜在的なものにすぎず、直接には与えられていないので、人々は自分達が相互に関係しあうためには労働のこの社会的性格を外化させなければならないが、この抽象的人間労働は、独自の外化の仕方をする。① 抽象的人間労働が生産物の価値対象性として反映され、この価値(抽象的人間労働の凝固)が価値関係のなかでその価値形態を他商品の物的姿態において受け取ること、② そしてさらに価値がその内容にふさわしく一般的価値形態を獲得すること、によって抽象的人間労働は真に外化するのである。

①の問題について。個々人の労働の社会的性格は直接には与えられていないから、生産物が抽象的人間労働の凝固(＝価値)からなっており、どんな商品とも同等なものとして現れることによって、それを生産した人々の労働が社会的労働＝抽象的人間労働であったことが示される。ところで、この抽象的人間労働の凝固＝価値性格は、価値関係を媒介として関係させられる他商品の物的姿態を通してでなければ現れない⁹⁾。一個の商品は他商品を価値として等置することによってその商品に自己の価値形態としての地位をおしつけ、自己の価値存在をあらわす。「価値関係およびそのうちに含まれている価値表現の内部では抽象的な一般的なものが具体的なもの、感覚的で現実的なものの属性としてではなく、むしろ逆に感覚的で具体的なものが抽象的で一般的なもののたんなる現象形態として、あるいは規定された実現形態と

して妥当する」(Marx〔2〕S.771.)ので、関係させられる他商品はそれ自体としてみれば有用労働の現実化であるが、価値関係のなかでは抽象的人間労働が有用的性格を纏って現実化したものとしてみなされるのである。

「諸商品はそうすることによって〔交換価値の形態において諸商品が価値として現象し、相互に価値として関係することによって——佐藤〕同時に共通な社会的実体としての抽象的人間労働へ関係する。諸商品の社会的関係はもつぱら、量的にのみ異なり質的に同等な、したがって互いに置き換わることができ、交換可能な・このような社会的実体の表現として相互に妥当させることのうちにある」(Marx〔2〕S.28.)。

②の問題について。上で述べたように、労働の社会的性格は他のどんな労働とも無区別・同等な抽象的人間労働ということのうちにがあるが、この抽象的人間労働という性格は潜在的にすぎないから、この性格を外化させるためには、自己の生産物を抽象的人間労働の凝固＝価値としてどんな商品とでも置き換わりうるものとして表示しなければならない。だが、価値がその内容にしたがってどんな商品とでも置き換わりうるものとして実際に現れるのは、諸商品が特定の排他的—商品でその価値を表現するところの一般的価値形態においてのみである。第一形態や第二形態では無区別・同等な抽象的人間労働の凝固としてどんな商品とでも置き換わりうるという価値性格は十分に現れないのである。第三形態において価値の形態とされる排他的—商品の物的姿態は、他の全ての商品によって抽象的人間労働の現実化したものとしてみなされ、どの商品とも直接的に交換可能なものとして現れる。この形態をもって人々は自己の労働の社会的性格を外化し、実際に社会的接触を可能にするのだ。

こうして諸商品の社会的一般的関係のなかで社会的労働の必然的な一般的外化形態＝価値の一般的な形態としての地位を与えられた排他的—商品、これこそが貨幣である。

貨幣は、他の生産物との直接的交換可能性、しかも排他性を備えた直接的

交換可能性を、その自然属性として有する神秘的な物として現れる（というのも、貨幣を媒介した運動は、運動そのものの結果では消えてしまって、何の痕跡も残していないから）。こうした「貨幣の謎」をマルクスは貨幣形態の生成を示すこと、すなわち貨幣を媒介した諸関係を思惟によって復活させ、貨幣形態の本質的規定を説くことによって、同時に消し去った。直接的交換可能性の根拠、および人々の社会的関係が物に結び付いて現れることを第一形態の分析のなかで、そしてこの直接的交換可能性が排他性を伴うことの理由を価値形態の発展の追跡を通してそれぞれ解明したのである。貨幣は商品の性質に対して外的で、そこから超越したのではなく、商品価値の質的転化形態にすぎない。ベイリーやリカードが商品の価値関係に含まれている質的側面を考察せず、貨幣形態を理解できなかったのに対して、マルクスは形式それ自体が内容であるというヘーゲルの考えを念頭におきつつ¹⁰⁾、商品を生産する労働の独自の社会的性格をもとに価値形態の質的側面を分析し、貨幣形態の秘密を解いたのであった。（「価値は二つの対象物の間の一関係を指す」（ベイリー〔13〕訳4ページ）と述べたことで有名なベイリーは貨幣を単に価値の量的な尺度としてのみ考察し、貨幣をその質的側面において商品の質的転化として研究しなかった——彼はこの研究において貨幣で表される価値の尺度と価値の内在的尺度およびその実体とを混同しただけであった。もともと、この混同は両者の区別の必要を逆説的に示したという点で意義をもっていたのではあるが——。また、価値と価値形態を——不十分さを残しつつも——区別した点でベイリーと異なるリカード（リカード〔11〕）も抽象的人間労働のもつ諸規定のうち、労働の独自の社会的性格としての規定性ではなく相異なる労働量の計測単位としての規定性に着目して価値形態の量的規定性の解明を試みただけであった¹¹⁾。）

さて、商品を生産する労働の独自の社会的性格という生産関係の問題との関わりをなかで貨幣を説くマルクスは、そうした立場上当然のこととして、アダム・スミスのように（スミス〔15〕93—94ページ）交換過程の問題から、す

なわち交換の困難から貨幣の必然性をみる考え方を退けている¹²⁾。マルクスは交換過程の諸困難に次のような地位を与えたにすぎなかった。すなわち、人々が社会的に関係しあうためには価値が一般的価値形態をとらねばならないのだということを「実証」し、現実化する媒介としての地位である¹³⁾。マルクスは次のように言う。

「どの商品所持者にとっても、他人の商品はどれでも自分の商品の特殊的等価物とみなされ、したがって自分の商品はすべての他の商品の一般的等価物とみなされる。だが、すべての商品所持者が同じことをするのだから、どの商品も一般的等価物ではなく、したがってまた諸商品は互いに価値として等置され価値量として比較されるための一般的な相対的価値形態をもっていない。したがってまた、諸商品は、けっして商品として相対するのではなく、ただ生産物または使用価値として相対するだけである。われわれの商品所持者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考えこむ。太初に業ありき。……商品の本性の諸法則は、商品所持者の自然本能において自分を実証したのである。彼らが自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた商品として関係させることができるのは、ただ、自分たちの商品を、一般的等価物としての別の或る一つの商品に対立的に関係させることによつてのみである。このことは、商品の分析が明らかにした。しかし、ただ社会的行為だけが、ある一定の商品を一般的等価物にすることができる。それだから、他のすべての商品の社会的行動が、ある一定の商品を除外して、この除外された商品で他の全商品が自分たちの価値を全面的に表わすのである」(Marx〔1〕S.101. 訳116ページ)。

みられるように、マルクスは交換過程の困難を通じて貨幣が形成されるのは、結局のところ商品の分析によつて明らかにされたところの価値の本性が実証されたからであると言っている。

商品社会においては、人々の社会的接触は商品を価値として互に関係させることによつて可能となるが、商品をそうしたものとして関係させること

ができるのは、ただ、商品所有者が自分達の商品を、一般的等価物としての別のある一商品に対立的に関係させることによつてのみである。だが、交換過程ではどの商品所有者も「自分の商品はすべての他の商品の一般的等価物」とみなすのであるから、「どの商品も一般的等価物ではなく、したがつて諸商品は……一般的な相対的価値形態をもたない」のであつて、諸商品は価値として全面的に相対しえない。個々人の労働の社会的性格が潜在的である関係上、生産物が抽象的人間労働の凝固＝価値として現れることによつて初めて人々の社会的接触が可能となるから、商品は価値としてどんな商品とでも置き換わりうるものとして現れなければならないが、交換過程での諸商品の価値形態は第二形態をとつていて、価値性格がその内容に従つてどんな商品とでも交換可能なものとして現れてはいないので、人々は社会的全面的には関連しあえないのである。そこで、諸商品を価値としてどんなものとも置き換わりうるものとして表し、人々の社会的全面的関連を可能にするところの第三形態の成立が要請されることになる。つまり、第二形態が諸商品の価値性格を十分に表現していないから、それを真に表現する一般的価値形態の成立＝価値形態の発展が必然となるのである。交換過程で貨幣が発生してくるのは、このように価値性格がそれを真に表現する一般的形態を要求するからであつた。

交換過程の地位は一般的価値形態を必然たらしめるこうした価値の性格を実証する点にあるにすぎない。人々が実際に社会的な接触をもつのは交換過程においてだから、人々の社会的接触を媒介するところの貨幣の必要もまた交換過程において現れる¹⁴⁾。価値が一般的な価値形態を受け取らない限り交換は困難になるという形をとつて、価値の本性の現実化＝貨幣形態の創造が商品所有者に強制されることになるのだ。

交換の困難のなかで貨幣の創造が商品所有者に強制されるとはいえ、このように交換過程の困難それ自体に貨幣の必然性があるわけではない。交換の在り方は根本的にその社会の生産関係によつて規定されるのであつて、交換

の困難を通じて貨幣が登場してくること自体、商品を生産する労働の独自の社会的性格の発展という商品生産関係それ自身の問題によって必然化される。価値性格が十分に表現されていないから、価値形態は発展して第三形態にまで移行せざるをえなくなるのである。そこで、マルクスは貨幣の必然性を交換の困難という問題との関係において明らかにするということはせず、逆にそうした問題をさしあたり捨象し、まずもって価値性格との関連において貨幣の必然的生成を価値形態論で説いた。価値性格が十分に表現されていないから価値形態は発展して第三形態にまで移行せざるをえなくなるということ、貨幣の必然的生成の論証として価値形態論で説いたのである。（例えば、価値形態論の第二形態から第三形態への移行に関する叙述をみてみよう。彼は第三形態への移行を説くにあたり、「人間労働が統一的な現象形態をもってはいない」（Marx〔1〕S.79. 訳87ページ）という点で、第二形態が価値性格を十分に表現しない欠陥のある形態であることを指摘している。この言葉によってマルクスが意図したことは、「諸商品の価値対象性は、それらがこれらの物の純粋に『社会的な定在』であるからこそ、……諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならない」（Marx〔1〕S.80-81. 訳90ページ）ということ、つまり価値の性格から価値形態が第二形態ではなく第三形態でなければならないということが要請されるということである。マルクスはこうして一般的価値形態成立の必然性が価値の性格にあることを論じた上で、第二形態のうちに含まれている「逆関係を言い表わし」（Marx〔1〕S.79. 訳88ページ）で一般的価値形態の成立を説いている。価値性格が十分に表現されていないから価値形態は発展して第三形態にまで移行・発展せざるをえなくなるということが語られているのは明らかであろう）。

「経済学者たちは、拡大された交換取引がつきあたる外部的な諸困難から貨幣をみちびきだすのが例となっているが、そのさい彼らは、これらの困難は交換価値の発展、したがって一般的労働としての社会的労働の発展から生じるものだということを忘れている」とマルクスが言っているように（Marx

[4] S.36. 訳 56 ページ), 貨幣は交換の困難につきあつた人々の偉大な知恵の産物なのではなく、生産関係すなわち商品を生産する労働の独自の社会的性格によって必然化されるものなのである¹⁵⁾。

II 発生史的方法の意義

社会的生産関係は物に結び付けられており、物として現れる。そこで、マルクスはまずその社会的生産関係を担うところの商品の分析を行った。彼は商品の要因たる価値を、労働の独自の社会的性格(抽象的人間労働)をもとに解明し、次いでその価値から一般的価値形態という貨幣形態の本質的規定を説いている。では、マルクスはどのような方法をもちいてこの貨幣の本質的規定を叙述しようとしたのであろうか。この点に目を向けると、実に注目すべき際立った特徴がみられる。彼はその方法について次のように語っている。

「いまここでなされなければならないことは、……貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な……姿から……貨幣形態に至るまで追跡することである」(Marx〔1〕S.62. 訳 65 ページ)。

「貨幣形態は発展した商品形態に他ならないのだから、貨幣形態は明らかに単純な商品形態から生じる。それゆえ単純な商品形態が理解されれば、考察されるべくなおのこるものは、20 エルレのリンネル=1 着の上着という単純な商品形態が20 エルレのリンネル=2 ポンド・スターリングという姿態を身につけるために通過しなければならない一連の諸変態だけである」(Marx〔2〕S.776.)。

マルクスは貨幣形態の本質的規定を説く際に、貨幣形態の生成史を叙述するという方法をとっている。価値形態の発展の端緒にある第一形態の分析の

のちに、第一形態から一般的価値形態までの必然的發展を追跡するという貨幣形態の生成史の叙述をもって貨幣形態の本質的規定を説いているのである（金という特殊な素材規定ではなく、金に結び付けられている人々の社会的関係＝一般的価値形態という面に貨幣形態の本質的規定がある以上、貨幣形態の本質的規定の把握は貨幣形態の素材的規定を捨象し、一般的価値形態の生成の解明をもって行われた¹⁶⁾）。

一般的価値形態という貨幣形態の本質的規定の解明のためには、そもそも価値形態とは何かということ、価値形態がなぜ一般的でなければならないのかということが示されなければならない。そこで、価値の性格をもとにマルクスは、前者の問題を第一形態の分析によって、後者の問題を第一形態が第二形態、そして一般的価値形態へと必然的に發展していく過程を示すことによって、それぞれ解明しようとしたのである¹⁷⁾。価値形態とは何かということ、それを解明するためには、価値形態の最も基本的な関係のみを含み、それ以上の余計な規定をもたない形態を所与として分析対象とすることが必要であることは言うまでもない。第一形態は価値形態の發展系列の最も未發展な段階にある形態ではあるが、同時にまた価値形態の基本的規定のみを含む形態である。そこで価値形態とは何かという問題をマルクスは価値形態の發展の端緒にある第一形態の分析によって果たした。だが、ここで何よりも注目すべきは、価値形態が一般的でなければならないという問題の説かれ方である。価値形態がなぜ一般的でなければならないのかを示すことが必要であるなら、なにも価値形態の必然的發展＝一般的価値形態の必然的生成を示さなくても、各發展形態を所与として取り上げ、比較類型の見地から一般的価値形態が価値概念に唯一適合的な形態であることを論じれば十分であるようにも思える。だが、マルクスはそうした方法をとっていない。「価値形態が価値概念から發生することを証明する」(Marx〔2〕S.34.)というように、価値の性格を形態發展の必然的根拠として「貨幣形態の生成 (Genesis)」の過程を説いている（価値が十分に表現されていないから価値形態は第一形態にはとどまりえず、發展して一般的価値形態へ必然的に移行するということが語られている。すなわち、

まず第一に、価値形態を生み出さないものとして価値概念を取り扱っているのではなく、生み出すものとして取り扱っているものであり、第二に——この点は第一の点からくる必然的な結果でしかないが——、第二形態、第三形態をそれぞれ所与として並べたてたのではなく、それらの生成を示している。事物（一般的価値形態）のうちにある発展の必然的根拠（価値の性格）の展開によって事物（一般的価値形態）が必然的に生成してくることを論証することによって、価値形態が一般的でなければならないことを示そうとしているのである。貨幣が商品であることを感じつつも商品のうちから貨幣を説かなかったという点で古典派経済学を批判したマルクスは、古典派経済学の残したこの問題の解決方法として、商品価値の性格を軸に価値形態の発展＝一般的価値形態の必然的生成を論じる必要性を強調し¹⁸、価値形態論の中心的課題を「貨幣形態の生成（Genesis）を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な……姿から……貨幣形態にいたるまで追跡することである」としたのであった。明らかに価値の性格の展開＝価値形態の発展＝一般的価値形態の必然的生成を示すことが決定的に重視されている。一体なぜであろうか。この方法の根底に流れている思想、すなわちその意義が明らかにされねばならない。

マルクスが比較類型的な方法ではなく、価値の性格の展開＝価値形態の発展＝一般的価値形態の必然的生成を論証するという方法を重視したのは、事物に即して一般的価値形態を把握するためであった。認識とは事物をその特定の内容によって知ることであるから、事物の存在の必然性もまた事物自体に即して、つまり事物自体のうちからおこる必然的生成の過程の論証として示されなければならない。事物は事物のうちにある必然的根拠によって現にあるがままの姿をとっているのだから、認識としても事物のこうした面を把握しなければ不十分である。それゆえ、一般的価値形態が商品価値の性格によって規定されたその必然的な現れである以上、価値形態が一般的でなければならないということもまた比較類型的な方法ではなく、事物自体に即し

て、つまり価値の性格の展開による一般的価値形態の必然的生成の論証をもって示すことが重要なのである。一般的価値形態は自らのうちにある生成・発展の法則（価値の性格）によって成立したのだから¹⁹⁾、その発展法則を展開させ一般的価値形態の生成を論証することによって初めて一般的価値形態の必然性が真に示されることになる。つまり一般的価値形態についての十分な認識が可能となるのである。このことが、比較類型的な方法ではなく発生史的な方法が価値形態論でとられた主な理由であり、発生史的方法の意義である。マルクスは価値形態論の冒頭において「いまここでなされなければならないことは、ブルジョワ経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことである」と述べ価値形態論の課題を設定しているが、この言葉のうちに秘められているものは、貨幣が商品であることを認識しつつも商品のうちから貨幣を展開できなかった古典派経済学や商品と貨幣の内的連関すら認めようとしないブルジョワ経済学に対し、商品自体のうちから貨幣が生成せざるをえないことを事物に即して、言い換えれば商品のうちからの貨幣の必然的生成過程の論証を通して示し、両経済学に批判をくわえることであった。

以上みてきたように価値形態論の叙述方法は、一言でいえば、発展法則（価値の性格）によって生じた事物（一般的価値形態）をかかえる発展法則の展開（発展法則が事物を生み出す過程）のなかでとらえ、事物の真の内容を叙述する方法であると総括できるが、この方法はマルクスがヘーゲルから学んだものである。ヘーゲルは事物の発展法則を看過したり、あるいは発展法則を取り出してもそれを展開しないような事物の認識方法をきびしく退けた。自己のうちに潜在的に存在する諸規定を自ら現実化していく、すなわち自己を特殊化する普遍（発展法則）の展開によってのみ事物が真に認識されるのであって、自己のうちから何も生み出さない普遍、すなわち抽象的普遍によっては事物は認識できないと説いたのである。抽象的普遍だけをもって事物の認識を行う方法に対して彼がくわえた批判は、主に次のようなものであった。

第一に、抽象的普遍だけに依拠するという方法では、事物の諸規定の内的必然的連関が把握できないという点である。確かに、抽象的普遍の析出によって特殊は普遍と関係させられ、孤立的な規定を超越し、関係のうちに定立させられるはず。しかし、抽象的普遍は自らが特殊へ関係することに對し無関心であり、特殊を除外するものなので、抽象的普遍をもって対象の諸規定を説明しても、普遍と特殊、特殊と特殊とは外的に結合されるにすぎない(Hegel [10] S.52. 訳・上巻75ページ参照)。事物のうちにその諸規定を内的に統一するものの存在を看取したヘーゲルは、抽象的普遍をもって事物の諸規定を外的に統一する方法を退けたのである。第二の批判は、対象の生成・発展が示せないということである。抽象的普遍は自己のうちから何も生み出さない静的なものだから、事物を与えられたもの、あるいは不変・不動なものとしてしかみれない²⁰⁾。

事物は普遍者との関係において存在するものだとみ、その普遍者がかかる特殊な形態をとるという区別の内的発生と諸規定の内的必然的連関とをヘーゲルは重視したのである。抽象的普遍を、「特殊を除外しているために、特殊によって制限され否定され」(Hegel [10] S.106. 訳・上巻155ページ)るものとみたヘーゲルは、他方、事物の諸規定の内的必然的連関とその存在の必然性を与えるものとして、自己を特殊化する具体的普遍(発展法則)に絶大なる地位を与えている。この発展法則(自己を特殊化する普遍)の思想をヘーゲルは「概念」というタームのなかで説いた。ヘーゲルによれば、概念とは、普遍・特殊・個別をモメントとし、そのモメントの各々が全体的な概念をなしているものであり(Hegel [10] S.311. 訳・下巻127-128ページ参照)、事物に内在した活動、「生命の原理」(Hegel [10] S.318. 訳・下巻137ページ)であるという。つまり、ヘーゲルにとって「概念」とは、自己のうちに潜在的に存在する諸規定を自ら現実化していく具体的普遍のことであり、事物の発展法則に他ならない。事物はこの普遍者によって現にあるがままのものであり、したがってまた普遍者の外化したものだから(「事物は、それらに内在し、それらの中で

自己を啓示する概念の活動によって、現にそれらがあるような姿を持っている」Hegel [10] S.313. 訳・下巻130ページ)、この普遍者を意識すれば、事物の諸規定の内的必然的連関も存在の必然性も説けるとみたのである²¹⁾。事物はその内部から規定されたものであつて、事物のこうした本性をとらえずに、認識上事物に外的に述語を与えてはならない。概念的認識とは、かかる普遍者を展開することによって事物をとらえることであつた。

私が思うに、發展法則によって生成・發展してきた事物は、この發展法則の外化したものとしてとらえられてこそ、十全に認識されるものである。發展法則は、その内に潜在的に存在している諸規定を現実化させながら、様々な發展段階を経て事物を現にあるがままの姿に確立させるにいたつた。事物は、この發展法則によってその生成・發展および諸規定の内的連関とを与えられているのである。それゆえ、事物の把握においてこうした發展法則を無視すれば、たとえ分析によって事物の諸規定が個々のものへと分解され、事物がどのような仕組みをもつて成り立っているかが明らかにされるとしても、その事物の諸規定が一体どういう法則によって一つのまとまりをもつた全体へ必然的に形成されるにいたつたのかということや、あるいはそれが今後どういうものになっていくのか、歴史的發展のなかでそれ（事物）のもつ固有の存在意義とは何か、といった点の解明が残されざるをえないのである。確かに抽象的普遍を析出することの意義は大きいものであり、そうした作業は事物を認識する上で必要なことではある。例えば、ある一定の社会的發展段階での生産様式を問題にする場合、生産一般という歴史貫通的法則（抽象的普遍）を取り出す作業を行つていけば、この生産様式のより深い認識が可能となろう。かかる歴史貫通的な法則がこの社会においていかなる特殊な形態をとつて貫かれているかを問題にすることができ、この發展段階の生産様式の特異性、つまり他の生産様式との差異性が明瞭にされるからである。だがそうではあつても上で述べたような理由から、事物に含まれている發展法則を取り出すことを怠つたり、またたとえそれを析出してそれを展開しなけ

れば事物の認識としては非常に不十分なものとならざるをえないのである。それゆえ、事物を真に認識するためには、事物を成り立たせている基本的関係を明らかにした後に、何よりも事物のもつ生成・発展の法則を展開することが決定的に重要であると思われる。(なお、事物を成り立たせている基本的関係が事物の発展に先立って論じられねばならないのは次のような理由からである。すなわち、まず第一に、事物の何たるかを明らかにすることなくしてその生成・発展を論じて、生成・発展が示されることの事物が我々にとってまだ空虚な表象にすぎない以上、叙述されるその生成・発展もまた空虚な表象にならざるをえないからである。また第二に、事物の発展段階は様々な非本質的な状態や外的な影響による攪乱的事態を伴うのが常であり、事物が自己の発展法則に基づいてどのように生成・発展してきたかということ明らかにするためにはこのような非本質的な状態や外的条件による攪乱的事態を捨象することが必要であるが、だがそもそもある事柄を非本質的なものとか攪乱的なものと言いうるには事物の基本的構造についての認識があつてこそ初めて可能となるからである。)

だから価値形態論にあつても、マルクスは価値形態を成り立たせている基本的関係(第一形態)を解明した後は、一般的価値形態の必然性を事物自体に即して示すために、価値の性格という価値形態の発展法則を展開し、一般的価値形態の必然的生成過程を論証している。

「貨幣形態は発展した商品形態に他ならないのだから、貨幣形態は明らかに単純な商品形態から生じる。それゆえ単純な商品形態が理解されれば、考察されるべくなおのこるものは、20 エルレのリンネル=1着の上着という単純な商品形態が20 エルレのリンネル=2 ポンド・スターリングという姿態を身につけるために通過しなければならない一連の諸変態だけである」。

実際、マルクスが発展法則の展開のなかで事物を把握するというヘーゲルの思想を受け継いだことは、『資本論』初版本文の価値形態論にあたるとこ

ろを閉じるに及んで彼が次のように語っていることからうかがえる。

「決定的に重要なことは、価値形態、価値実体、および価値の大きさの間の内的な必然的関連を発見すること、すなわち、観念的に表現すれば、価値形態が価値概念から発生することを論証することであつた」(Marx〔2〕 S.34.)。

価値形態論においては価値形態と価値実体との内的な必然的連関の把握が重要だといわれているが、今ここで注目しなければならないことは、価値形態と価値実体との内的な必然的連関を示すこととは、価値概念の展開（価値性格からの価値形態の発生過程の叙述）を論証することだとされていることである。“観念的に表現すれば”という言葉はヘーゲルを意識したものであつて、ヘーゲルの「概念」についての思想、すなわち発展法則の展開によつてのみ、事物の真の認識ができるとした思想が価値形態論に脈々と流れているのが分かる。

マルクスがヘーゲルと異なるのは、ヘーゲルが事物の生成・発展法則を意識するという思想を次のような考え方、すなわち「実在的なものを、自己を自己のうちに総括し、自己のうちに深化し、そして自己自身から発して運動する思惟の結果である」(Marx〔5〕 S.22. 訳23ページ)とする考え方のなかで展開したのに対し、マルクスは「観念的なものは、物質的なものが人間の頭のなかで転換され翻訳されたものにほかならない」(Marx〔1〕 S.27. 訳22ページ)とする立場に立つてこの思想を展開したということである。ヘーゲルは事物の発展法則を「理念という名のもとに一つの独立な主体にさえ転化させている思考過程」(Marx〔1〕 S.27. 訳22ページ)のうちに求め、事物自体のうちには見いださなかつたという欠陥をもつ。フョイエルバッハの見解（フョイエルバッハ〔17〕）、すなわち「自然はすべての哲学とは独立に存在している。自然が土台であつて、自分自身自然の産物であるわれわれ人間は、その上で生まれそだつてきたのである。自然と人間とのほかにはなにも存在しない」(Engels〔9〕 S.272. 訳21ページ)という見解をもとに唯物論的な立場に立つて

ヘーゲルを批判し、マルクスは発展法則の展開のなかで事物をとらえるというヘーゲルの思想を唯物論的に受け継いだのであった。フォイエルバッハのようにヘーゲルの理論を「むぞうさにわきへ投げすて」(Engels〔9〕S.273. 訳23ページ)、ヘーゲルの功績たる事物に関する「歴史的意識」とそれを把握する方法を撰取することなく提起された唯物論的方法是、事物をその連関、生成と発展、運動のなかで解明しえない不十分な方法だったからである。

「ヘーゲルは忘れられ、新しい自然科学的唯物論が發展したが、この唯物論は、理論的には十八世紀の唯物論とほとんど違わず、たいていはただ、より豊かな自然科学上の材料、とくに化学および生理学上の材料をもっている点で進んでいるにすぎなかった」(Engels〔8〕S.473. 訳260ページ)。

「世界全体、その發展と人類の發展、さらにこの發展の人間の頭脳における映像を正確に示すことは、弁証法的な道によって、生成と消滅、前進的または後退的な変化の全般的な交互作用にたえず留意する場合にだけ、達成することができるのである」(Engels〔7〕S.22. 訳22ページ)。

唯物論的な立場に立って事物の發展、内的連関を論証しようとしたマルクスにあっては、事物の發展法則は事物自体のうちに客観的に存在するものであり、また事物の發展の叙述における抽象的なものから具体的なものへの進展は実在的なものそのものの成立過程ではなく、事物の生成・發展をわがものとし、論証する思惟過程であった。実在的なものは頭の外でその独立性をもっており、それに対し思惟は、世界をわがものとするための「自分にとって可能なただ一つの仕方」(Marx〔5〕S.22. 訳23ページ)すなわち分析でもって事物の發展の根底に貫かれている事物の内的法則を取り出し、それを基礎として事物の發展を論証するのである²²⁾。

「われわれは、現実の事物を絶対的概念のあれこれの段階の模写と見るのではなく、ふたたび唯物論的にわれわれの頭脳のなかの概念を現実の事物の模写と解した。これによって弁証法は、外部の世界および人間の思考の運動の一般的諸法則にかんする科学に還元されたのである」(Engels〔9〕

S. 292-293. 訳 53-54 ページ)。

「叙述の仕方は、形式上、研究の仕方とは区別されなければならない。研究は、素材を細部にわたってわがものとし、素材のいろいろな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な紐帯を探りださねばならない。この仕事をすっきりすませてから、はじめて現実の運動をそれに応じて叙述することができる」(Marx〔1〕 S.27. 訳 22 ページ)。

発展法則の展開の中で事物を把握するというヘーゲルの思想は、貨幣形態の本質的規定を説いた価値形態論を理解する上で極めて重要な地位にある。マルクス主義の発展的後継者レーニン「ヘーゲルの《論理学》全体をよく研究せず理解しないではマルクスの《資本論》、とくにその第1章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかつた」(レーニン〔54〕 訳 150-151 ページ)と述べているが、彼も「たんなる抽象的普遍ではなくて、特殊なもの豊かなも自己のうちに含むところの普遍」というヘーゲルの思想を「非常にいい」と評価し、この点について『資本論』を参照するよう記している(レーニン〔54〕 72-73 ページ)。事物をその発展法則の展開のなかで把握するという思想を知ることなしに価値形態論は理解されえないことを示唆しているように思われる²³⁾。

以上述べてきたように、事物をその発展法則の展開のなかで把握するということが価値形態論の形態移行の根底に脈々と流れている思想である。価値形態論の中心的課題は「貨幣形態の生成〔Genesis〕を示すこと」だとされているが、価値性格という価値形態の発展法則の展開＝貨幣形態の生成を論じることによって一般的価値形態の真の内容を叙述することが重視されているのである。

おわりに

本稿では、貨幣形態の本質的規定が商品の価値性格、より根本的には商品生産社会における独自の社会的性格との関連において問われるべきであること、またその際、発生史的方法によって論じられるべきであることを示したが、『資本論』における価値形態の移行の個々の具体的な中身がどうなっているのかということや、またそれに対して出されている諸家の批判については直接立ち入らなかつた。これらの諸問題を論じるためには、まずもって貨幣形態の本質的規定およびその叙述法に関する私自身の考え方が明らかにされていなければならないと思われるからであるが、次稿においてこうした諸問題を取り上げたいと思う。

〔注〕

- 1) 下平尾 勲「貨幣における矛盾の媒介と展開」吉原泰助ほか編『講座資本論の研究』第2巻、青木書店、1980年、83ページ参照。以下、下平尾〔25〕83ページというように、文献の引用、参照に際しては、本稿末尾の参考文献一覧に示した番号を用いて示す。
- 2) フラートンは、価値章標の本質とその発生根拠、したがってまた紙幣過剰による物価騰貴の意味には言及していない。その最大の理由は貨幣の本質に基づいて貨幣流通の諸法則を真に理解していなかつたことにあると私は思う。彼にとって貨幣とは、価値の一般的形態、排他的商品ではなく、「普遍的需要を有する便利な等価物」（フラートン〔12〕54ページ）でしかなく、紙幣と同列におかれるものであつた（フラートン〔12〕54-55ページ参照）。こうした貨幣観からは紙幣が金鑄貨のあくまでも代理として意義をもつのだという発想はでてこないであろう。なお、フラートンが退蔵貨幣としての機能を見落として「金貨を紙幣と同じく、流通量と必要量とを一致せしめる傾向を具有せざるものとみている」と遊部氏は批判しておられるが（遊部〔45〕9-10ページ）、しかしこの批判は妥当ではないように思われる。フラートンの叙述に曖昧さはあるが、しかし彼は「金は矢張り物価の騰落に従つて流通界に出没」（フラートン〔12〕137ページ）するとしているからである。
- 3) Marx〔5〕S.20-21。訳20-21ページ参照。生産は交換とならぶ特殊な契機ではあるが、同時にまた全体を根本的に規定する普遍なのである。

- 4) マルクス貨幣論の特徴および形成史については、下平尾[23]を参照されたい。
- 5) 久留間[26]。氏は、価値形態論では貨幣の「如何にして」が論じられるだけで、貨幣形成の「何によって」は交換過程論の問題であるとされた。すなわち「貨幣の形成の必然を論じることは、価値形態論の範囲外にあり、これが交換過程論の固有のテーマをなす」（久留間[26] 23ページ）とされたのである。氏のこうした考え方は多くの人達によって支持されている。例えば、鶴田[29]、富塚[64]、平田[63]、山本[50]、籠[90]、関根[77]、古川[28]などがあげられる。なお、フランス語版『資本論』をもとに久留間説に対し、「如何にして」＝価値形態論、「なぜ」・「なにによって」＝交換過程論という見解を対置するものとして、林[44]などがある。
- 6) 宇野[81]～[87]、日高[89]、小林[88]。なお、この説の批判としては、見田[57]がある。
- 7) 久留間[27] 145ページや鶴田[29]、大島[43]、竹永[70]、森川[30]、[31]、松永[72]、広田[93]などがあげられる。生産力の増大を基底とした交換関係の量的拡大から価値形態の発展を説こうとされる斎藤氏も、価値性格からの価値形態の展開の必要性を否定される（斎藤[52]、[53]）。またローゼンベルクも形態の特徴の抽出にとどまっているように思われる（ローゼンベルク[20] 124—157ページ）。なお、久留間氏の旧著[26]にあつては価値形態の発展が比較典型的な方法によって説かれるのではなく、まさに価値形態の発生として説かれるかのような記述があつたが（例えば、[26] 113ページ）、新著[27]ではそれが否定された。新著で氏の見解が統一的なものにされたのは、武田氏の久留間説批判によるものであると考えられる（武田[41]、さらに[42]も併せて参照）。また、久留間氏の価値形態論にあつては商品の価値の貨幣形態の生成を立証する価値表現の追跡がなかったとする批判もある。例えば、赤堀[33]参照。
- 8) 貨幣の本質規定が価値尺度という貨幣の一形態において説かれたのは、利潤、利子、地代という三つのものの実体をなす剰余価値が、利潤という特殊な一形態において説かれたのとちょうど同じである。なお、貨幣が最初に形成されるのは価値尺度の規定性においてではなく流通手段であるとする見方があるが（赤堀[34]）、私はそうではないと思う。「交換過程で対立するのは、特殊な諸商品だけであり、特殊な使用価値に体化された私的な諸個人の労働だけ」であつて、直接に社会的労働の産物ではないからだ。商品がこうしたものであるからこそ、交換に先立ってあらかじめ価値表現の過程で一般的に妥当な社会的労働の形態たる貨幣を創造しなければならぬのである。
- 9) 価値表現を理解する鍵として広く支持をうけている理論として久留間氏の「回りの論理」がある。しかし下平尾氏が指摘しているように氏の理論は「タウトロ

ギー」であるし、また価値表現を理解する鍵は「回り道」ではなく、商品を生産する労働の独自の社会的性格、価値性格にあると私は思う（下平尾[22]）。なお、久留間氏の「回り道の論理」をめぐっては「価値体」と「価値物」の区別の問題に関わって大きく二つの潮流がある。久留間氏にあっては両者の区別が欠けているので、両者の区別を入れるべきであるとする立場であり（井上[49]、浅野[74]、山本[75]、望月[91]、山内[71]）、もうひとつは久留間氏が浅野、山本両氏の批判を受け入れて価値物と呼んでいたのを価値体と改めたのに対しそうした訂正を不必要とみる見方である（富塚[66]、米田[92]）。また『資本論』の「回り道」の意味内容の理解をめぐっては、価値関係を通しての価値実体の表出を「回り道」とする見方（赤堀[32]、松石[62]）と、自らの価値を直接自分で表現できないために、他商品を価値として、他商品を生産した労働を人間労働として関係させ、その価値および人間労働としての性格を表現する特有な媒介的過程を「回り道」とする考え方（武田[40]）とがある。

- 10) 「形式には二通りあって、それは一方自己へ反省したものとしては内容であり……」（Hegel [10] S.265. 訳・下巻 60 ページ）。「相対的価値形態の内実」の意味をめぐっては、それを抽象的人間労働の社会的役割だとみる赤堀氏[35]、[36]と価値形態という形式自体のもつ内容だとする武田氏[40]との間で論争がある。
- 11) Marx [6] S.128, 135, 145. 訳 168, 177, 190 ページ参照。
- 12) もっとも、武田氏が指摘されるように（武田[37] 29 ページ）、『グラスゴー大学講義』では貨幣は何よりも価値尺度として説かれている（スミス[16] 355 ページ）。なお、スミスの貨幣論がマルクスの貨幣論に与えた影響を研究したものとしては、例えば浜田[95]などがある。
- 13) 下平尾[22] 80—84 ページ参照。
- 14) 私は交換過程論で説かれる貨幣は価値尺度であると考えるが、価値と使用価値の矛盾を流通手段としての貨幣の必然性をなすものとして認め、貨幣の必然性をその機能（価値尺度と流通手段）に即して二重に論じようとする見方がある（武田[37]、福原[69]）。しかし私は価値と使用価値の矛盾が貨幣の必然性をなすものであるとは思わない。また、貨幣の必然性もその機能に即して二重に論じられるべきであるとも思わない。貨幣の機能は社会的労働の一般的定在が商品運動のなかで受け取る形態規定性にすぎないと思うからだ。価値尺度と流通手段とは、社会的労働の一般的定在がおかれている商品運動において異なるにすぎず、社会的労働の一般的定在という点では同一である。なお、交換過程の困難を通して形成されるものが流通手段としての貨幣であるとする武田氏に反対し、それが価値尺度であることを説くものとしては、例えば米田[92]がある。また金貨論に反対するという問題意識から楊枝氏も米田氏と同様の立場をとられる（楊枝[67]）。

- 15) ヒルファディングは、この点に関する認識が曖昧であったがゆえに貨幣の必然性を見誤った。彼は、主に、人々の社会的連関が交換によって初めてつくりだされるものだと考えがちであった（ヒルファディング[18] 18ページ）。その結果、彼にあっては交換過程そのものから貨幣が必然的に生じるものとされ、生産関係、したがってまた価値の性格から貨幣の必然性が十分に説かれることはなかった。この点を的確に指摘したものとして、飯田[46]がある（他に飯田[47]、[48]も併せて参照されたい）。なお、ここでの飯田氏の見解に対しては、小野朝男氏から貨幣の必然性の論証という観点から批判が加えられている（小野[51]）。飯田・小野両氏の対立点と問題点を鋭く示したものとして、武田[38]がある。
- 16) 貨幣を把握する場合、貨幣の本質とは何かということだけでなく、なぜそれが牛や馬などではなく金という特殊な素材形態をとるにいたったのかという形態の必然性が問題となる。マルクスは、貨幣の地位を担う商品には貨幣の機能を果たすのに適した素材の規定が要求されるのだという点に着目して、この問題を「交換過程」において論じている（素材の規定の問題は、ノース[21]などマルクス以外のいろいろな人達によって指摘されていたことであった）。だが、金の貨幣地位の独占を交換過程において論じるこうしたマルクスの叙述に対しては、次のような批判が出されている。すなわち、金が貨幣としての地位を独占するにいたったのはその物理的屬性が価値の本性にふさわしいことから十分に説明できるのだから、この問題は交換過程論においてではなく、価値形態論において論じられるべき問題である、と。こうした考え方に立つものとしては、武田[37]、富塚[65]、楊枝[67]などがある（なお、武田氏のこうした考え方を批判するものとしては、山本[76]などがある）。だが、私はそうは思わない。まず第一に、排他的—商品（貨幣）が実際に排除されるのは、交換の困難を媒介とするものであるし、また第二に、実際にどの商品が貨幣になるかは、分割、合成の可能性、均質性といった価値尺度としての規定性に関わった事情だけによって決定されるのではなく、蓄蔵貨幣、流通手段としての規定性から要求される永遠性、運搬の容易さといった事情などによっても左右される事柄だからである。
- 17) 下平尾[22] 97ページ、[24] 118ページ参照。
- 18) 例えば、『資本論』初版では「決定的に重要なことは、……観念的に表現すれば、価値形態が価値概念から発生することを証明することであった」と述べられているが、この文章に次のような注を添えている。すなわち「古典派経済学の根本的欠陥の一つは、……商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけだすことに成功しなかったということである」（Marx〔2〕S.34-35.）と。またフランス語版においても「単純な商品形態は貨幣形態の胚種である」（Marx〔3〕45ページ）という第一形態から第三形態への必然的發展の叙述を総括する文

章に同じ注を添えている。なお、種瀬氏も「よりふさわしい新形態が、旧形態から展開されている」（種瀬[80] 191 ページ）ことをみとめておられる。

- 19) 「貨幣は、価値概念のうちにすでに萌芽としてふくまれている。それは展開された価値にすぎない」（Engels [7] S.287. 訳 317 ページ）。
- 20) こうした点は、見田氏がヘーゲル研究として詳細に展開されたものである（見田[55]参照）。本稿は、見田石介氏の次の二つの研究、すなわちヘーゲルの具体的普遍についての研究（見田[55]、ヘーゲル論理学研究会[61] ② 274 ページ）およびマルクス価値形態論における価値概念と価値定在の矛盾についての研究（見田[59]、ヘーゲル論理学研究会[61]）に多くを依拠している（なお、こうした見田氏の主張を受け継ぐものとしては、尼寺[68]がある）。もっとも、氏が価値形態論における価値形態の発展が現実のものではないとされる点には賛同しがたい。例えば、氏は「われわれが前に〔価値形態論で——佐藤〕みた必然性は現実的な必然性ではなく、たんにものの概念のあいだの必然的な関係にすぎない」と主張される（見田[56] 52 ページ）。これと同じ主張は見田[58] 183 ページ、[60]にもある。だが、私は価値形態論における価値形態の発展は現実的な必然性を論じたものであると思う。また具体的普遍の思想の価値形態論における生かされ方も、単に事物の概念のあいだの必然的な関係を確定するのに役立つという点ではなく、まさに発展法則に基づく事物の把握に役立つという点にあると考える。

そうしたわけであるから、価値性格を価値形態の現実的な発展法則として価値形態論を説く武田氏（武田[37]、[39]）を私は支持する。

- 21) 本稿では事物の有機的構造を把握する上での、自己を特殊化する具体的普遍の意義については論じないでおくことにする。この点については見田[55]を参照されたい。
- 22) 見田[58] 181 ページ。事物を把握する上での「分析」の意義を蘇生させたのは見田氏の功績である。これは、おおよそ衆目の一致するところである（例えば、明石[94]、関根[78]）。
- 23) ヘーゲルのこうした思想の意義および価値形態論におけるその重要性については、あまり評価されていないのが現状と言ってよいであろう（例えば、向坂[73]、森川[31]を参照）。

〔参考文献〕

- [1] K. Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Erster Band, K. Marx-F. Engels Werke, Band 23, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻第1分冊, 大月書店, 1965年。

- [2] K. Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Erster Band, Verlag von Otto Meisner, Hamburg, 1867.
- [3] K. Marx, *Le Capital*, Editeurs Maurice Lachatre et Cie, Paris 1872-1875. 江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版資本論』上巻, 法政大学出版局, 1979年。
- [4] ———, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie, K. Marx-F. Engels Werke*, Band 13, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1961. 杉本俊朗訳『経済学批判』国民文庫, 1953年。
- [5] ———, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Marx-Engels-Lenin-Institute, Moskau, Dietz Verlag, Berlin, 1953. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』第1分冊, 大月書店, 1958年。
- [6] ———, *Theorien über den Mehrwert, K. Marx-F. Engels Werke*, Band 26, Dritter Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1968. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第3分冊, 大月書店, 1970年。
- [7] F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, K. Marx-F. Engels Werke*, Band 20, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』第20巻, 大月書店, 1968年。
- [8] ———, *Karl Marx: Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Rezension), K. Marx-F. Engels Werke*, Band 13, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1961. エンゲルス「カール・マルクス『経済学批判』(書評)」杉本俊朗訳『経済学批判』国民文庫, 1953年, 所収。
- [9] ———, *Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, K. Marx-F. Engels Werke*, Band 21, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962. 藤川 覚・秋間 実訳『フォイエルバッハ論』国民文庫, 1972年。
- [10] Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* (1830), Erster Teil, *Die Wissenschaft der Logik*, Mit den mündlichen Zusätzen, *G. W. F. Hegel Werke* 8, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1970. 松村一人訳『小論理学』上下巻, 岩波書店, 1951-1952年。
- [11] D. リカード著, 羽鳥卓也・吉澤芳樹訳『経済学および課税の原理』上巻, 岩波書店, 1987年。
- [12] J. フラートン著, 阿野季房訳『通貨調節論』改造選書, 1948年。
- [13] S. ベイリー著, 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』日本評論社, 1951年。
- [14] J. S. ミル著, 戸田正雄訳『ミル経済学原理』第3篇, 春秋社, 1947年。

- [15] A. スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波書店、1969年。
- [16] _____ 著、高島善哉・水田 洋訳『グラスゴー大学講義』日本評論社、1947年。
- [17] L. フォイエルバッハ著、桑田悟郎訳『キリスト教の本質』大和書房、1977年。
- [18] R. ヒルファディング著、岡崎次郎訳『金融資本論』上巻、岩波書店、1982年。
- [19] D. ヒューム著、田中敏弘訳『政治経済論集』お茶の水書房、1983年。
- [20] D. ローゼンベルク著、宇高基輔・副島種典訳『資本論注解』第1分冊、青木書店、1962年。
- [21] D. ノース著、久保芳和訳『交易論』東京大学出版会、1966年。
- [22] 下平尾 勲『貨幣と信用』新評論、1974年。
- [23] _____ 「貨幣論の形成」種瀬 茂ほか編『資本論体系』第2巻、有斐閣、1984年。
- [24] _____ 「価値形態と貨幣の本質」大阪市立大『経済学雑誌』第55巻第2号、1966年。
- [25] _____ 「貨幣における矛盾の媒介と展開」吉原泰助ほか編『講座資本論の研究』第2巻、青木書店、1980年。
- [26] 久留間敏造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年。
- [27] _____ 『貨幣論』大月書店、1979年。
- [28] 古川正紀『価値形態論の課題＝価格の質的規定』『八幡大論集』第35巻第1号、1984年。
- [29] 鶴田満彦『『資本論』第1巻研究案内』『講座マルクス主義研究案内』第3巻、青木書店、1974年。
- [30] 森川憲道「マルクス価値形態論の主題について」関東学院大学『経済系』第150集、1987年。
- [31] _____ 「マルクスの発生史的方法」関東学院大学『経済学研究科紀要』第12・13号、1986年。
- [32] 赤堀邦雄「サービスク商品の価値と抽象的人間労働」関東学院大学『経済系』第144集、1980年。
- [33] _____ 「価値の貨幣形態と貨幣の謎」関東学院大学『経済系』第147集、1986年。
- [34] _____ 「商品の分析と価値論」関東学院大学『経済系』第139集、1984年。
- [35] _____ 「価値形態の発展とその内実」関東学院大学『経済系』第135集、1983年。
- [36] _____ 「『相対的価値形態の内実』は何を説明しようとしているか——武田信昭氏に対する反批判として——」関東学院大学『経済系』第132集、1982年。

- [37] 武田信照『価値形態と貨幣』梓出版社、1982年。
- [38] ———「価値形態論と交換過程論・貨幣の必然性に関する論争」種瀬 茂ほか編『資本論体系』第2巻、有斐閣、1984年。
- [39] ———「価値形態論の経済学と論理学」愛知大学『法経論集——経済・経営篇Ⅰ——』第90号、1979年。
- [40] ———「価値形態論の主題」(上)(下)、愛知大学『法経論集——経済・経営篇Ⅰ——』第106、107号、1984—85年。
- [41] ———「価値形態論と交換過程論 (上)(中)(下)——久留間理論への批判——」愛知大学『法経論集——経済・経営篇Ⅰ——』第75、76、77号、1974—75年。
- [42] ———「価値形態論における二つの基本問題」『金融経済』第196号、1982年。
- [43] 大島雄一『価格と資本の論理』未来社、1965年。
- [44] 林 直道「いわゆる《貨幣の謎》について」大阪市立大学『経済学雑誌』第73巻第5・6号、1975年。
- [45] 遊部久蔵『インフレーションの基礎理論』思潮書林、1948年。
- [46] 飯田 繁「貨幣の必然性——流通主義的貨幣論にたいする一批判——」大阪市立大学『経済学雑誌』第19巻第4・5号、1948年。
- [47] ———『マルクス貨幣理論の研究』新評論、1982年。
- [48] ———『商品と貨幣と資本』ミネルヴァ書房、1981年。
- [49] 井上周八「『価値形態論』論争」『立教経済学研究』第24巻第2号、1976年。
- [50] 山本二三丸「商品論の原点解説」遊部久蔵編『資本論講座1』青木書店、1963年。
- [51] 小野朝男「貨幣の必然性」和歌山大学『経済理論』第22号、1954年。
- [52] 斎藤悟郎「価値形態論の原点」新潟大学『商学論集』第14号、1981年。
- [53] ———「価値形態の発展」新潟大学『法経論集』第11巻第1号、1961年。
- [54] レーニン著、全集刊行委員会訳『哲学ノート』上巻、国民文庫、1964年。
- [55] 見田石介「ヘーゲル論理学と『資本論』」『見田石介著作集』第1巻、大月書店、1976年、所収。
- [56] ———「科学論」『見田石介著作集』第2巻、大月書店、1976年、所収。
- [57] ———「論理＝歴史説とマルクスの方法」『見田石介著作集』第3巻、大月書店、1976年、所収。
- [58] ———「資本論の方法」『見田石介著作集』第4巻、大月書店、1977年、所収。
- [59] ———「価値の実体と価値形態」宇佐美誠次郎ほか編『マルクス経済学体系Ⅰ』有斐閣、1966年。

- [60] 見田石介「貨幣の必然性」宇佐美誠次郎ほか編『マルクス経済学体系Ⅰ』有斐閣, 1966年。
- [61] ヘーゲル論理学研究会編『見田石介ヘーゲル大論理学研究』全3巻, 大月書店, 1979-80年。
- [62] 松石勝彦『独占資本主義の価格理論』新評論, 1972年。
- [63] 平田喜久雄『『資本論』の論理』法律文化社, 1979年。
- [64] 富塚良三『恐慌論研究』未来社, 1962年。
- [65] ———『経済原論』有斐閣, 1976年。
- [66] ———「価値表現の『回り道』の論理と交換過程の矛盾」福島大学『商学論集』第51巻第4号, 1983年。
- [67] 楊枝嗣朗「マルクスの貨幣形成論」『金融経済』第187号, 1981年。
- [68] 尼寺義弘『価値形態論』青木書店, 1978年。
- [69] 福原好喜「久留間理論の再検討」『金融経済』第165・166号, 1977年。
- [70] 竹永 進「価値形態の発展と抽象的人間労働」『金融経済』第211号, 1985年。
- [71] 山内 清「価値表現の『回り道』について」東京大学『経済学研究』第23号, 1980年。
- [72] 松永直幸「価値形態論と交換過程論」東京大学『経済学研究』第16号, 1973年。
- [73] 向坂逸郎『経済学方法論』社会主義協会出版局, 1979年。
- [74] 浅野 敏『『価値形態』に関する一考察』和歌山大学『経済理論』第122号, 1971年。
- [75] 山本広太郎「単純な価値形態について」大阪市立大学『経済学雑誌』第76巻第3号, 1977年。
- [76] ———「価値形態論と交換過程論」大阪市立大学『大阪市大論集』第27号, 1977年。
- [77] 関根猪一郎「価値論論争の現局面と今後の課題」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第37号, 1982年。
- [78] ———「戦後価値論論争の展開」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第34号, 1982年。
- [79] 田中素香「管理通貨制と金の価値尺度の廃棄」東北大学『経済学』第51巻第2号, 1989年。
- [80] 種瀬 茂「商品論」岡本博之ほか監修『マルクス『資本論』の研究』上巻, 新日本出版社, 1980年。
- [81] 宇野弘蔵『価値論』河出書房, 1947年。
- [82] ———『経済原論』上巻, 岩波書店, 1950年。
- [83] ———『価値論の研究』東京大学出版会, 1952年。

- [84] 宇野弘蔵『マルクス経済学 原理論の研究』岩波書店，1959年。
- [85] ———『経済学方法論』東京大学出版会，1962年。
- [86] ———編『資本論研究』筑摩書房，1967年。
- [87] ———『新訂 経済原論』青林書院新社，1967年。
- [88] 小林弥六『経済原論』お茶の水書房，1978年。
- [89] 日高 晋『経済原論』時潮社，1964年。
- [90] 麓 健一『貨幣論』有斐閣，1966年。
- [91] 望月俊昭『「価値形態」に関する一考察』成城大学『経済研究』第67号，1979年。
- [92] 米田康彦「価値形態論と交換過程論における矛盾の外化」吉原泰助ほか編『講座資本論の研究』第2巻，青木書店，1980年。
- [93] 広田精孝「価値形態論と交換過程論」種瀬 茂ほか編『資本論体系』第2巻，有斐閣，1984年。
- [94] 明石博行『「資本論」における分析的方法と発生史的方法』経済理論学会編『日本資本主義の国際的地位』青木書店，1987年。
- [95] 浜田和夫「A. スミスの貨幣論がマルクスに与えた影響について」東北大学『経済学』第45巻第2号，1983年。